

令和 2 年 5 月 23 日現在

機関番号：17701

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K04305

研究課題名（和文）教科としての道徳における指導と評価の方法の確立を目指した学習モデルの開発

研究課題名（英文）Developmental study of procedure of instruction and evaluation on moral education

研究代表者

假屋園 昭彦（Kariyazono, Akihiko）

鹿児島大学・法文教育学域教育学系・教授

研究者番号：30274674

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：6本の論文にまとめられた研究期間中における成果を以下に報告する。第一に、道徳の授業における児童の変容を把握するための授業用ワークシート（以下WSと略記）を開発した。このWSによって児童は、道徳的・倫理的思考の道筋を習得でき、教師は児童の意見の変容を把握できる。第二に、道徳的判断力の育成を目指した二種類の授業デザインを開発し、実践可能であることを証明した。一種類目は、児童に道徳的判断を行う際の価値規準を考えてもらう内容である。二種類目は、道徳的判断を行う過程を授業の中で再体験する内容である。これらは人間の普遍的な道徳的判断過程を理解することによって、道徳的判断力の育成を目指したものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで教科ではなかった道徳は、小学校で平成30年、中学校で令和元年度から「特別の教科 道徳」として教科になった。この変化を受け、学校現場では道徳教育の実践をめぐる戸惑いと模索が広がった。本研究は、こうした学校現場の現状を克服し、教科としての道徳の今後の実践を方向づける内容であった点に意義がある。本研究の第一の意義は、学校現場の授業ですぐに使うことができるという実践性をもつ点にある。第二に本研究は以下の点で学術的意義をもつ。すなわち、これまで曖昧であった児童の道徳的判断過程を明らかにし、児童の倫理規準の特徴を浮き彫りにした。このように本研究は、実践面と学術面の双方に貢献する内容である。

研究成果の概要（英文）：This project study was to develop the work sheet aiming at the children's opinion change at moral lesson and aiming at evaluating children's morality and the two kinds of moral lesson design aiming at bringing up children's moral judgment ability. Firstly, the work sheet showed that children acquired process of moral thinking and teacher grasped children's morality change. Secondly, moral lesson design showed that children comprehended criterion of moral judgment and moral judgment process. This work sheet and lesson design have function of bringing up children's morality. Present study show direction of moral education. Specially, bringing up children's moral judgment ability and evaluation of moral lesson.

研究分野：教育心理学

キーワード：道徳的判断力 道徳教育 指導方法 評価方法 学習モデル

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

これまで教科ではなかった道徳は、小学校で平成 30 年度、中学校で令和元年度より、「特別の教科 道徳」として教科という新しい位置づけになる。この方向に沿って平成 26 年 10 月、中教審の答申により教科化に向けての新しい方向性が示された。これを受けて平成 27 年 3 月に道徳の改正学習指導要領、平成 27 年 7 月に「特別の教科 道徳」の改正学習指導要領解説が示された。

新たな方向性の最大の特徴は、道徳的価値（勇気、誠実、寛容といった徳）の理解および教科としての学習活動の二点が強調されたところにある。この二点が強調された背景は次の点にある。すなわち教科化以前の道徳の時間は、読み物資料中の登場人物の気持ち（道徳的心情）の推察および道徳的实践のために大切な気持ち（道徳的实践意欲、 するためにはどんな気持ちが必要でしょうか）の推察に終始していた。こうした漠然とした推察活動では、どんな力が身に付くのか不明である。そこで今後は道徳教育の中に、明確な目標をもつ学習活動としての科学性と厳密性が求められると言える。

教科化に際して示された、考える道徳、議論する道徳、という提言も、授業で行うべき学習活動の提案と解釈できる。今後は道徳の具体的な学習過程の構築が喫緊の課題となる。しかし現在、この問題は、学校現場では全くの白紙状態で模索が始まったばかりであり、学校現場からの要望は高い。本研究はこうした現状を受け、道徳的価値の理解を目指した学習モデルの開発を目的とした。

に c

現況の授業は、授業と日常生活との道徳的思考の重なりが見られない。現況の授業展開は、最初に読み物資料を読み、次に資料中の登場人物が心の葛藤を乗り越え、道徳的实践を行うために大切な気持ちを推察する。そして今後はその気持ちを大切にしようという自覚化活動で終わる。この展開は児童の学習というよりも、授業で教師が何をすればよいのか、という教師が授業を作るための展開である。したがってこの展開で体験した思考過程を児童生徒は日常生活で辿ることはない。結果的に、授業での体験が日常生活に活かされないことになる。これに対して本研究で構築する授業デザインの独自性は、日常生活で道徳的価値が機能する過程をモデル化し、このモデルの各過程を、外在的な学習過程として児童生徒が授業で実体験する、という点にある。道徳的価値という心理特性が日常生活の中で果たしている機能を授業課程に反映させるといって全く新たな授業観に基づく。

### 2. 研究の目的

このような問題意識に基づき、学習モデルの開発に際しては、以下の三点を明らかにすることを目的とする。この三点は教科化の要となるが、現在のところ大きな方向性が示されたのみで、学校現場で実践できる水準ではない。この三点とは、道徳的価値の理解を軸とした授業デザインの構築、発達過程の体系化の指標、および評価の方法である。

#### (1) 日常生活における道徳的価値理解を具体化した授業デザインの開発

学習指導要領の道徳教育の目標には、道徳的諸価値の理解、物事を捉える多面的・多角的な視点、自己を見つける自己理解、他者と共に生きるための他者理解が掲げられている。本研究ではこれらの一つ一つの要素が日常生活で機能する過程を児童が実体験できる授業デザインを開発する。

#### (2) 道徳的価値理解の発達過程を体系化した指導過程の開発

教科化では、道徳の内容の発達の体系化が目指されている。しかしその具体的な方向性は示されていない。発達の体系化に際しては、用いる指標、そして体系化の水準が問題になる。あくまで授業で活用できる具体的な水準が求められる。本研究では、道徳的価値理解を指標とした発達過程の体系化を行う。具体的には、授業中に児童生徒が考え出す道徳的判断の規準の量と質の変化を発達過程の体系の指標とする。

#### (3) 道徳的価値理解の評価方法

教科には評価が必要になる。文科省から示された評価方法は、数値ではなく、個人の成長の姿の把握を目指した記述式の個人内評価になっている。これ以上の具体的内容は示されていない。そこで学校現場で実践可能な水準での評価方法の開発が必要になる。本研究では、授業での個人の発話と記述の質的分析で実施する。そしてこれらの質を評価の対象として分析する方法を開発する。

### 3. 研究の方法

学習モデルにおいて開発を目指した三点（授業デザイン、発達過程の体系化、評価方法）の目的を達成するために以下の方法を用いた。

#### (1) 授業デザインの開発・発達過程の体系化に基づく指導過程の開発

授業デザインには、教科化の新方針である、考える道徳、議論する道徳という要素を全面的に導入した、授業は、日常生活の中で道徳的価値が機能している複数の過程を、個々の学習活

動として具体的に外在化し、実体験活動とした。個々の学習活動を段階という名称で以下に示す。

#### 第1段階：実行決定規準の発見活動

特定の道徳的価値（寛容、友情、誠実等の徳）に基づく行為を実行するか否かを決定する規準を考えてもらう段階である。寛容を例に説明すると、児童生徒の日常生活の中で「許すか、許さないか」を決める規準を考えてもらう。同時に道徳的判断を行う際の規準が発達によってどう変化するかを質的に分析することで、発達過程の体系化の指標づくりを行った。

#### 第2段階：価値成立規準をととした道徳的価値の特性の発見活動

児童生徒への課題として、価値成立規準に合致する道徳的価値を発見してもらう。例を示す。例えば、限度がなくなるとその性質が変わる徳は何か、無制限の徳は徳と言えるのか、徳を向ける相手によって意味が変わる徳は何か、徳を向ける対象がどこまでになるかという対象範囲が問題になる徳は何か、特定の徳を実行しなかった場合、共同体の存続が危うくなる徳は何か、「私があなたにしてあげたことをあなたも私にしてくれるべきだ」という相互性の考えは徳にあてはまるか、道徳的行為は、その結果が成功したか、失敗したかで価値は異なるか、という課題を児童生徒に考えてもらった。

#### ③ 第3段階：社会的望ましさに基づく実行決定規準の序列化活動

#### ④ 第4段階：自分の考えに基づく実行決定規準の序列化活動

第1段階で発見した実行決定規準を、二種類の規準に基づいて重要だと考える順に序列化してもらう。この活動は、教科目標に記された自己理解活動の具体化に相当する。現況の自己理解活動は、単にこれまでの自分を振り返らせる大雑把な内容であった。本研究では、自己理解活動を、自分の価値規準を明確に知る活動と捉える。この活動を授業水準で具体化するために、自分が最優先に選択する規準を外在化させ、可視化する。

実行決定規準の序列化を二種類に分類した目的は以下の点にある。教師がもつ道徳の困難感の一つに、児童生徒の発言が建前に終始し、本音を引き出せない、という現象がある。建前とは社会的望ましさである。教師が自分の考えとしての本音を問うているが、児童生徒は社会的望ましさを回答している。これは教師が求めている思考と実際に児童生徒が行っている思考とが乖離している状態である。この問題を克服するために、現況では暗黙的に混在している思考過程を、厳密に別々の課題として区別化し、建前と本音の思考を分けて行えるようにした。

#### 第5段階：実行決定規準に基づく他者理解活動

教科目標に記された他者理解を授業水準で具体化することにある。現況での、資料中の登場人物の心情読み取り活動は、内容が曖昧で、身に付く力が不明である。本研究では、資料の活用法を他者理解と新たに明確化した。そのうえで、他者理解活動を、他者が最優先に選択した実行決定規準を理解する活動と厳密に定義する。人は他者理解として、この活動を日常的に行っている。この活動を授業で意識的に行わせることで日常生活に活かすことができる。

### (2) 道徳的価値理解の評価方法

個人の成長の姿を評価するという文科省の方針であるが、成長の指標を決める必要がある。本研究では道徳的価値を指標とする。具体的には、児童生徒が発見した実行決定規準の質の変化、価値成立規準をととした道徳的価値の見方の変化、社会的望ましさに基づく実行決定規準の序列化をとおして、特定の規準に固執せず、複数の規準を柔軟に使い分けられる力、他者理解活動から、他者の行為を価値の規準の選択という面から理解する力、である。これらを指標として、個人の発言と記述の質的分析をととした評価方法を開発する。この方法は、授業の各段階を評価対象にすることができ、複数の方向からの質的で精緻な評価が可能になる。現況のように、授業全体をざっと振り返るといった大雑把な方法ではない。また数値による計量的な評価と違って、児童生徒の道徳的価値理解の成長の実態を正確に把握できる。

研究代表者は道徳教育とともに対話研究をテーマとしている。そのため、発言と記述の質的分析方法の知識は有している。

## 4. 研究成果

本研究の成果は6本の論文としてまとめることができた。研究目的に掲げた授業デザインの開発・発達過程の体系化に基づく指導過程の開発は、「考える道徳を目指した授業デザインの開発」シリーズの3本の論文にまとめられた。

これら3本の論文の概要を以下に示す。1つ目の論文は、「道徳的判断力の育成を目指した判断過程の体験型授業デザインの開発」という副題をもつ。授業デザインは、実際に人間が日常生活で道徳的判断を行う際の過程をそのまま反映した授業を開発し、この授業デザインが実践可能であることを証明した。

本研究では、道徳的判断過程を、道徳的価値に含まれる複数の価値規準から特定の価値規準を選択する過程であると捉えている。この過程を実際に児童に体験してもらう授業デザインを開発した。この研究から、小学校高学年児童は道徳的判断が必要な場面で、複数の価値規準から判断にふさわしい価値規準を選び分けることができることが可能であることが示された。

2 本目は「道徳的判断力の育成を目指した価値規準発見型授業デザインの開発」という副題がつけられた。ここでは特定の道徳的価値（寛容）に基づいて判断する際の規準として複数の規準が児童に示された。具体的には「許すか、許さないか」を判断するための6種類の規準が小学校高学年児童に示された。これらの価値規準は公型と私型に分類できた。児童には、許すか許さないかの規準として、これらの6種類の規準の優先度を序列化してもらった。その結果、児童は、価値規準には公型と私型という二種類があることを理解し、判別する力があることが明らかになった。また複数の価値規準を序列化する活動によって、児童に道徳的判断の際に求められる価値規準の判別活動を体験してもらうことが可能であることが立証された。

3 本目は、「自問自答型発問を用いた問題解決的な学習としての道徳の授業デザインの開発」という副題がつけられた。これまでの道徳の時間に教師から発出される問いは、登場人物の心情理解を問う内容ばかりであった。この発問を考える経験によって児童に身に付く力の内容は不明であり、この発問は、児童にどのような力を身に付けさせることを意図したものなのかも不明である。

こうした現況を克服するために、本研究では、児童が授業後も、日常生活の中で自問自答できる発問を学習させることを目的にした。研究目的の授業デザインの開発の「第2段階：価値成立規準をととした道徳的価値の特性の発見活動」に相当する内容であった。この活動を行ってもらうために、児童に日常生活の中で、物事を道徳的、倫理的に捉える視点として、自問自答できる発問の開発を行った。この研究では、小学校低学年と中学年を対象とした自問自答型発問に基づく授業デザイン開発を行った。

研究目的に掲げた評価方法については2本の論文にまとめられた。この論文の1本は小学校低学年を扱い、もう1本は高学年を扱った。内容は、教科化の方針に沿って、児童の学習状況の変容を把握することを目的とした。具体的には、学習状況の把握のためのワークシートを開発した。本研究では、ワークシートには、現在考えられている以上の可能性があると捉えた。すなわち、ワークシートは単に意見を記録する機能だけをもつのではない。ワークシートに思考の道筋を記すことによって、児童はその思考の道筋を習得することができる。したがってワークシートには、児童に思考のロジックとしての道筋を習得させるための教材としての意味があると捉えた。

具体的に本研究で開発したワークシートは、対話活動をととして意見の変容を把握する内容であった。この研究の重要な点は、小学校の低学年と高学年を対象に、児童の意見の質の変容を捉える際の詳細な評価規準を作成したところにある。この評価規準を使えば、児童の意見がどのように変化したかを捉えることができる。そして変容の質の程度を捉えることができる。

これまで、児童の意見の変容を捉える指標は存在しなかったが、この指標を新たに開発したところに本研究の意義がある。

また本研究では、小学校低学年の児童にも対話活動が可能であることを証明した点にも価値がある。これまで小学校低学年の児童には対話活動は無理であろうという暗黙的な考えが学校現場にはあった。しかし、本研究から小学校低学年の児童にも対話活動が可能であり、意見の変容も生起することが示された。

6 本目の論文は、自問自答型発問の意義とその作成方法を整理した内容であった。さらに道徳の教科書から、いかにして道徳的価値を抽出するかについて述べた内容であった。特にこれまで教師が抱える困難さには、資料や教科書に掲載してある物語から、いかにして道徳的価値に迫るか、があった。本論文はこの問題にも言及した。

道徳の教科書は、他教科と異なり、教科書の内容をそのまま迎れば一定の知識が習得できるような内容ではない。この点に道徳学習の困難さがある。道徳の教科は、具体的な物語が記載されている。物語はあくまで具体例である。したがって授業においては、具体例である物語から抽象的な道徳的価値を抽出する活動が必要になる。この活動は道徳に特有の内容である。また物語の中に複数の道徳的価値が含まれていることも多い。例えば一つの物語のなかに友情と信頼といった二つの道徳的価値が含まれている例は多い。6本目の論文には、こうした今後の課題となる内容にも言及した。

研究成果は以上のようにまとめることができる。研究開始時に設定した研究目的は概ね達成できたと評価できよう。また教科書からの道徳的価値の抽出方法といった新たな課題も見出すことができた。

特に道徳的判断を行う際の価値規準を扱う研究、および対話をととした意見の変容を評価するための規準の作成は、今後の活用可能性の大きさを感ぜさせるものであった。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 假屋園昭彦	4. 巻 1231
2. 論文標題 道徳の資質・能力を育むための自問自答型発問づくり	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 学校教育（広島大学附属小学校 学校教育研究会）	6. 最初と最後の頁 14-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 假屋園昭彦・赤崎健樹	4. 巻 70
2. 論文標題 道徳の授業における対話をとおした児童の変容を把握するための評価方法の開発（ ）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 鹿児島大学教育学部研究紀要（教育科学編）	6. 最初と最後の頁 239-248
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 假屋園昭彦・赤崎健樹	4. 巻 69
2. 論文標題 道徳の授業における対話をとおした児童の変容を把握するための評価方法の開発（ ）	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 鹿児島大学教育学部研究紀要（人文・社会科学編）	6. 最初と最後の頁 131,141
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 假屋園昭彦・牟田伊織	4. 巻 第26巻
2. 論文標題 考える道徳を目指した授業デザインの開発	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 假屋園昭彦・池下龍郎	4. 巻 第68巻
2. 論文標題 考える道徳を目指した授業デザインの開発	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 鹿児島大学教育学部研究紀要教育科学編	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 假屋園昭彦	4. 巻 第68巻
2. 論文標題 考える道徳を目指した授業デザインの開発	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 鹿児島大学教育学部研究紀要人文・社会科学編	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----